

二〇三三年九月一九日(参加者九名)

大木を攀じりし蔦の風に笑む	ぼんこ
石垣の天辺埋む螢草	ぼんこ
踏石の真中を萩の通せんぼ	ぼんこ
蔦かづら鎧ふ廃墟の赤レンガ	ぼんこ
喬木の樹間を過ぎる秋の雲	ぼんこ
木漏れ日の径に散らばる木の実かな	あひる
柵あれど盗人萩は内へ外へ	あひる
萩叢へ石並べ敷く小径かな	あひる
若芒絵筆のごとく真直ぐに	あひる
草萩も万葉園に彩を添ふ	うつぎ
万葉園に紛れ込みたる灸花	うつぎ
すすき戦ぐ風の十字路なりしかな	うつぎ
芒原理もれる歌碑は相聞歌	もとこ
吟行に一服もらふ萩の風	もとこ
公園の小川水無き残暑かな	もとこ

万葉の歌碑をめぐりて萩の道	わかば
歌碑の道巡りつ数ふ千草かな	わかば
喬木の葉擦れの音や風は秋	わかば
風の道盗人萩を二夕分けす	よう子
赤とんぼメタセコイアの空高く	よう子
刻々と変はる筋雲秋夕焼	こすもす
うち仰ぐ秋天高く落生松	たか子

定例会みひの選

二〇三三年九月一九日(参加者九名)